

イエス・キリストの黙示 - その二

契約の名前

Jeff Pippenger

2023-08-10

最初に基本的な前提となるポイントを示しておくため、これまでの記事には多くのことを盛り込みました。これからは、本題により焦点を絞っていきます。ご辛抱いただき、ありがとうございます。

太初から、神はご自身が誰であり、どのようなお方かについての私たちの理解を深めようとしてこられた。その働きにおいて、神はご自身について啓示された事柄を人々が理解できるよう、いくつかの手法を用いてこられた。そして、その一つが「名」の用い方である。聖書において神に与えられた多くの名だけでなく、神に選ばれた代表者たちに与えられた名も含まれる。神は悪の側の代表者も善の側の代表者もお選びになる。

神はまた、御自分が選ばれた契約の民におけるディスペンセーションの変化を用いて、歴史を通じて段階的に御性質への理解を高めてこられた。ゆえに、さまざまなかたちで現れる契約にかかわるディスペンセーションの変化の歴史もまた、神の御性質と御本性の真理が拡大されていくことを物語っている。

黙示録の第1章を、序論であり後続の章への鍵として捉えるなら、書の残り全体に影響を及ぼすいくつかの真理が、この冒頭の章に見いだされます。その真理の一つは、イエス・キリストがどのような方であるかに関わるもので、単に彼がアルファでありオメガであるというだけではありません。もし黙示録の第1章に真理が示されているなら、それは確かに最後の世代のための試金石となる現在の真理です。最後の世代とは、ペテロが示した「選ばれた世代」を指します。

私たちがこれまで探究してきたキリストの御性質の一つは、キリストが終わりから初めを示されるということです。キリストが多くの人々と一週間のあいだ固く契約を結ばれた時は、文字どおりのイスラエルから霊的イスラエルへと移行する、契約に関する経綸上の変化を表しています。聖書に示されている経綸の変化、すなわちキリストの御性質と存在に関する知識の増大を物語るものとして挙げられるのは、アブラム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、キリスト、ウィリアム・ミラー、そして十四万四千人です。それに重ねて、もう一つの経綸の変化の系統があり、これは神の教会の七つの時代を示していて、ヨハネの黙示録二章と三章の七つの教会によって表されていますが、その点にはまだ触れません。アダムとエバにおいても、墮落前と墮落後というかたちで経綸の変化があり、また当然ノアの時代には、洪水前から洪水後へと経綸の変化がありました。これらすべての系統は、私たちが扱っている光に寄与していますが、今は選民に焦点を当てています。

キリストは契約の週の初めに宣教を始められたとき、バプテスマを受けられた。

イエスはバプテスマを受けると、すぐに水から上がった。すると、天が開け、神の霊が鳩のように下って来て、彼の上にとどまるのを彼は見た。また、天から声があっ

て、「これはわたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」と言われた。マタイ 3:16, 17.

イエスが水から上がり、こうして契約の週が始まったとき、父なる神は最初に「イエスは神の子である」と宣言された。「最初の言及の原則」を理解しているなら、その事実は大きな力を持つ。理解していないなら、そうでもない。

初めに、神は天と地を創造された。地は形がなく、むなしく、やみが淵の面をおおっていた。神の霊が水の面を動いていた。創世記 1章1、2節。

創世記にあるように、油注ぎの儀式では神格の三位格が示されている。

イエスが神の子であり、ダビデの子であり、人の子であるという真理は、その後の三年半の間、律法学者やパリサイ人をたびたび動揺させた。預言的には、イエスは洗礼のときに「イエス」から「イエス・キリスト」へと変わった。イエスが洗礼を受けたとき、彼は「キリスト」となった。これは「油注がれた者」を意味し、ヘブライ語では「メシア」という語である。そしてもちろん、ヘブライ人はメシアを待ち望んでおり、彼がダビデの子であることを知っていた。地上の歴史で最も神聖な三年半を始めるために彼が「油注がれた」とき、彼は聖霊が下って来るのを見、父なる神の御声を聞いた。

それは非常に深い意味をもつ油注ぎの儀式であり、その場で彼とその働きについて宣べ伝えられたメッセージは「彼は神の子である」ということだった。ユダヤ人にとってさらに衝撃的だったのは、彼が神の子であるということだけではなく、神の子として実際に自分は神であると主張したことである。ユダヤ人は、それをそのような冒瀆的な主張だと理解し、到底受け入れることができなかった。ユダヤ人にとってのジレンマは、アブラハムのジレンマでもある。というのも、アブラハムはユダヤ人の父であり、契約の父であり、さらに契約の条項を守って生きるために必要とされる信仰の象徴でもあったからである。

神と契約関係に入るために必要な信仰についてのアブラハムの模範は、その信仰が試されなければならないことを示している。アブラハムの試練は、彼の信仰が本物が単なる思い込みかを明らかにするものであり、たとえそれが以前の神の言葉と矛盾するよう見えたとしても、彼が神の言葉に従うのかどうかを問うものだった。アブラハムは、人身犠牲は殺人であり、当時彼が暮らしていた偶像礼拝の民の偶像的な慣行を体現するものだと知っていた。律法学者とパリサイ人は、彼らの契約史の初めから神はただひとりの神であることを知っており、また、イエスが自分は第二の神だと主張していることも知っていた。彼らは最後の試練によって試されていた。

聞け、イスラエルよ。私たちの神、主はただひとりの主である。申命記 6:4.

前節をモーセが記したその歴史の中で、神はその時以降自身が「エホバ」として知られるべきであることを、すでにモーセに告げていた。もはや「主なる全能の神」としてのみ知られるのではなく、その時以来「エホバ」として知られることになったのである。まさにその同じ歴史の中で、御名に表されるご性質の理解をさらに高めておられる一方で、神はまた、神は唯一の神であることを古代イスラエルに厳粛に告げておられる。では、キリストの時代のユダヤ人は何と考えるべきだったのか。

イエスの宣教の後期、エルサレムへの凱旋入城で頂点に達したころ、ユダヤ人たちは、イエスが子どもたちにご自分を賛美する歌を歌うことを許していることに、再び仰天した。

前を行く群衆も、後に続く群衆も、叫んで言った。「ダビデの子にホサナ。主の御名によって来られる方に祝福あれ。いと高きところにホサナ。」マタイによる福音書 21:9

パリサイ人を怒り狂わせたその歌の歌詞は、イエスを「ダビデの子」とし、さらに「ダビデの子」が主の御名であると述べている部分だった。イエスの宣教の初め、凱旋入城、そしてもちろん十字架においても、その論争にはイエスの名をめぐる騒ぎが伴っている。

そこで、ユダヤ人の祭司長たちはピラトに言った。「『ユダヤ人の王』と書くな。むしろ、『彼は「わたしはユダヤ人の王である」と言った』と書け。」ヨハネによる福音書 19:21

もちろん、ピラトがその銘文を「わたしはある——ユダヤ人の王だ」と書き換えていたとしても、本質的には正しかっただろう。というのも、「わたしはある」は、イエスがご自身について繰り返し示された名だったからだ。もちろん、神のことばを変えるためにその誤った論理を適用する——とりわけそれが十字架の物語であるときに——などということ、人は決してしない、そうだろうか。イエスは「ユダヤ人の王」であったし、また「わたしはある」でもあった。だから「わたしはある——ユダヤ人の王だ」という表現は、ある意味では正確だ。だが、要点はそこではない。

最初から、中ほどを経て、その三年半の終わりに至るまで、彼の名は常に論争の的であった。契約の御名の系譜について理解すべきことは多いが、ここで私が示したいのは、古代イスラエルの終わりに、ユダヤ教会においてキリストの名に関わる揺さぶりがあったということである。ダビデの子として、彼はメシアであるための資格を備えており、神の子として（すなわちご自身も神であるという意味で）、また人の子として、イエスは選民に大きな試練を突きつけた。彼らの契約史の初めにモーセが神は唯一の神であることを明確に教えたのに、この人がどうして神であり同時に神の子であると主張できるのか。

しかし、それこそがキリストが人々の間を歩まれた目的だった。神はキリストのうちにいられて、人々をご自身と和解させておられ、それは人々にイエスを見せることによって行われた。イエスは「わたしを見た者は父を見たのだ」とはっきりと教えられた。この歴史は、神に選ばれた民としての文字どおりのイスラエルの終焉を示しており、その初めから、神が誰でありどのようなお方であるかをめぐる顕著な論争があった。

ファラオは言った。「イスラエルを行かせるためにその声に従えという主とは何者だ。私は主を知らないし、イスラエルを行かせはしない。」出エジプト記5章2節

ファラオは、神を知ることに対する無神論的な反抗の象徴であるだけでなく、アブラハムの神に関するエジプト人の理解も表している。そして主は繰り返し、エジプトでのご自身の驚くべき御業は、人類が主がどのような方であるかを知るためのものであったと語ってこられた。神の選民としての文字どおりのイスラエルの始まりの歴史は、終わりの型となっている。

両方の歴史において、神が誰であり何であるかについての理解が欠けており、それは神のさまざまな御名と結びついている。だが、私たちにとってより重要なのは、選民としてのイスラエルが終わりを迎える時期におけるキリストの歴史が、ユダヤ人が自分たちのメシアを受け入れることにつまずいた主な理由の一つは、彼らの契約の歴史の初めに神の御言葉が神は唯一であると示していると彼らが知っていたことにあった、と示していることである。なんというジレンマだろう。

それからは、だれも彼に何ひとつ質問しようとはあえてしなかった。彼は彼らに言われた、「どうして人々は、キリストがダビデの子だと言うのか。ダビデ自身が詩編の書で言っている、『主はわが主に言われた、「わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」』ダビデはこのように彼を主と呼んでいるのに、どうして彼がその子でありえようか。」ルカによる福音書 20:40-44.

これはユダヤ人にとっての最後の質疑応答の時であった。というのも、そのやり取りの後、「彼らは彼に何ひとつ質問しようとはしなかった」からである。彼はちょうど、「失われた家」に対するご自分の奉仕の最後の問いに答え終えたところであり（そして預言の物語にはいつも「失われた家」がある）、そのうえで自らの名を「ダビデの子」、すなわちメシアとして取り上げる。三年半を通じて、その論争には彼のさまざまな名が含まれており、それらは彼の人格と本性を表している。彼の名は、最初、すなわち洗礼の時に言及され、さらに福音書の他の箇所と同様に、凱旋入城と十字架における「失われた家」との最後のやり取りの中でも取り上げられている。

律法学者の質問にイエスが答えておられるとき、パリサイ人たちはイエスの周りに近く集まっていた。そこでイエスは向き直って彼らに問われた。「あなたがたはキリストについてどう思うか。彼はだれの子か。」この問いは、メシアに関する彼らの信仰を試し、彼を単なる人間と見るのか、神の子と見るのかを明らかにするためのものであった。多くの者が声をそろえて答えた。「ダビデの子です。」これは、預言がメシアに与えていた称号であった。イエスが大いなる奇跡によってご自身の神性を現し、病人を癒し、死人をよみがえらせたとき、人々は互いに、「この方はダビデの子ではないのか」と言い合った。スロ・フェニキア人の女や、盲人バルティマイ、その他多くの者たちが、「主よ、ダビデの子よ、私をあわれんでください」と助けを求めて叫んだ。マタイ 15:22. イエスがエルサレムに乗って入られたときには、「ダビデの子にホサナ。主の御名によって来られる方に祝福あれ」と喜びの叫びで迎えられた。マタイ 21:9. その日、宮にいた幼子たちも、その喜びの賛美を唱和した。しかし、イエスを「ダビデの子」と呼んだ多くの者は、彼の神性を認めてはいなかった。彼らは、ダビデの子が同時に神の子でもあることを理解していなかった。

『キリストはダビデの子である』という主張に答えて、イエスは言われた。「では、ダビデはどのようにして霊において〔神からの靈感の御霊〕彼を主と呼び、こう言っているのか。『主はわが主に言われた、「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座していなさい。」』。もしダビデが彼を主と呼ぶのなら、どうして彼はその子なのか。そして、だれも彼に一言も答えることができず、その日以来、だれひとりとして彼にこれ以上質問しようとはしなかった。」 The Desire of Ages, 609.

メシアとしての油注ぎと、救うために来られた人々との最後のやり取りは、イエスの神性、その名の象徴性、そしてもちろん初出の法則をめぐるものだった。イエスは、歴史上のダビデの歩みを用いて霊的なダビデについて教えることによって、ユダヤ人への直接的な働きを締めくくられた。なぜ、主が主に、共に御座に着くよう告げるときについて、ダビデが言及するのだろうか。初めの王ダビデは、終わりにおける霊的な王ダビデを表しているからである。失われた家に向けたイエスの最後の言葉を正しく理解する唯一の方法は初出の法則を適用することであり、その法則を知らなければ適用することはできない。

彼が失われた家に向けて発した最後の宣言は、理解されるために「初出の原則」の理解を必要とした。イエスは、最後の宣言として失われた家に真理を示すため、ダビデとダビデの子を用いた。結局のところ、彼らはダビデの家だったのだから。ゆえにイエスは、父（ダビデ）を取り上げてそれを「ダビデの子」へと向け、また子（ダビデの子）を取り上げてその父（ダビデ）へと向けた。「終わりの日」にエリヤのメッセージが行うと預言されているように、彼は父を子へと向けたのである。これが古代の文字どおりのイスラエルへの彼の最後のメッセージであり、それは初出の原則に基づいていたゆえにエリヤのメッセージでもあった。したがって、初出の原則そのものが、イエスのメッセージがこの原則に基づくエリヤのメッセージであることをも裏づける。もしバプテスマのヨハネのエリヤのメッセージが、イスラエルの失われた家への最後の警告メッセージの最初のものであったなら、初出の原則は、彼らに与えられる最後のメッセージもまたエリヤのメッセージであることを要求する。そして実際、そのとおりであった……

以上を踏まえて、私はここから、初出の原則、すなわちアルファとオメガに基づく一点を導き出したい。古代イスラエルの始まりにおいて、神が誰でありどのようなお方であるかという理解をめぐる論争があり、それは古代イスラエルの終末に起こった同じ論争の予型となっていた。古代イスラエルの終末において、キリストの働きには、イスラエルの家の失われた者たちに神が誰でありどのようなお方であるかを教えることが含まれていた。終末の歴史においては、初めに確立された原初の真理に立脚したキリストへの抵抗が存在した。現代の霊的イスラエルも、その歴史において同じ預言的特徴を備えることになる。

アドベンティズムの初期には、歴史家たちによれば、ミラー派は主として二つのキリスト教宗派から成っていた。すなわち、メソジスト派とクリスチャン・コネクションである。メソジスト派の主要な信条は、正しいキリスト教的生活を送ることに基づいていた。彼らには「方法」があった。クリスチャン・コネクションの主要な信条は、カトリックの三位一体教義への反対に要約できるかもしれない。

私の調査の及ぶ限り、ミラー派の指導者層のほぼ全員がクリスチャン・コネクションのその教義を信奉していました。セブンスデー・アドベンチスト改革運動（SDARM）には、いまなお「反三位一体主義」というミラー派本来の理解を保持し、広めている多くの分派があります。開拓者たちの理解を保持する人々にとってのジレンマ（そして現在の論争の源）であり、今までもこれからも続くものは、彼らが保持し推進している教義的立場にホワイト夫人が直接反対している多くのさまざまな箇所、どのように対応するかという点です。

私は次のように言うよう指示を受けている。進んだ科学的な考えを探し求めている人々の見解は信頼してはならない。次のような表現がなされている。「父は見えない光のようであり、子は姿をとった光のようであり、御霊は四方に注がれる光である」。「父は露、すなわち目に見えない蒸気のようにあり、子は美しい形に集められた露のようであり、御霊はいのちの座へ降りた露のようである」。別の表現では、「父は目に見えない蒸気のようにあり、子は鉛色の雲のようであり、御霊は降って潤す力を働かせる雨である」。

これらの心靈主義的な表現は、まったくの虚無にすぎない。

それらは不完全で、真実ではない。

それらは、地上のいかなる似姿も比べ物にならない威厳を弱め、貶める。

神は、ご自身の御手が造られたものと比べられる方ではない。それらは、人間の罪のゆえに神の呪いのもとで苦しんでいる、単なる地上のものにすぎない。

父なる神は、地上のものによって言い表すことはできない。父なる神は、神格の満ち満ちたものの全体を御存在において備えておられ、死すべき者の目には見えない。

御子は、神格のすべての満ち満ちたものの現れである。神の言葉は、彼が「そのご本質の明確なかたち」であると宣言している。「神はこの世を愛し、その独り子をお与えになった。彼を信じる者はだれでも、滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」ここに父なる神の人格が示されている。

キリストが天に昇られたのちに遣わすと約束された慰め主は、神格の満ち満ちた全き豊かさを備えた聖霊であり、キリストを個人的な救い主として受け入れ信じるすべての人々に神の恵みの力を現す。天の三者は、生ける三つの位格である。これら三つの大いなる力—父と子と聖霊—の御名によって、生ける信仰によってキリストを受け入れる者は洗礼を受け、これらの力は、キリストにある新しいいのちを生きようとする彼らの努力において、天の御国の従順な臣民と協力して働くであろう。特別証言、シリーズB、第7号、62、63。

その箇所は、父・子・聖霊を定義しようとしていた人々の「見解」を「地上のもの」と同一視している。そして彼女はこう言う。「父なる神は地上のものによって言い表すことはできない。」彼女が述べている二つの点に注意してほしい。うち一つは矛盾のように聞こえるかもしれないが、彼女は、言ってみれば神格を三つの神としてしまうような誤った記述を指摘している。それは神格の誤った記述だが、彼女は、その誤った定義が神格における神の数を取り違えているという点については言及していない。

また、彼女は、地上の事柄は父なる神を描写するために用いることはできないと言っていることに注目してください。まさにその言明の中で、彼女自身が地上の事柄を用いています。子ども、母、父、叔母、いとこといった関係で呼び合うのは人間です。そしてイエスは、私たちは天使のようになるので、天においても、新しくされた地においても、もはや結婚はないと語っています。天使には男の子や女の子という区別はありません。人間が互いの関係を定義するために用いる用語は、神がご自身の本性とご性質について私たちを教えるために用いてこられました。神の本性とご性質を人に教えるために靈感が用いたその「地上の事柄」ですら不完全なのです。

私たちは、「天の三者には生ける三人の方がおられる」「父、子、聖霊である」と教えられている。これら三者に地上的な心靈主義的觀念を結びつけることは忌むべきことだが、「これら三つの偉大な力の御名」を神格の聖書的定義に結びつけることは忌むべきことではない。

女預言者は、神格を構成する三つの大いなる力の「名」は父と子と聖霊であると言う。あらゆる聖書の真理と同様に、一行一行を積み重ねてまとめるとき、完全な証言は、明らかにされたすべての道しるべから成っていなければならない。預言者たちの証言は総合されるべきである。ダニエルはキリストにPalmoniという名を与えている（ほかの名もあるが、これは一例にすぎない）。ヨハネは彼をアルファとオメガと呼び、モーセは彼をエホバと呼ぶ。エレン・ホワイトによれば、彼の名は父と子と聖霊である。

サタンは…偽りを絶えず持ち込み、真理から引き離そうとする。サタンの最後の欺きは、神の御霊の証しを無きものにするのである。「幻がなければ、民は滅びる」（箴言29:18）。サタンは、さまざまな方法で、またさまざまな手先を用いて巧妙に働き、神の残りの民が真の証しに寄せる信頼を揺るがそうとする。

証言に対してサタンの憎しみがかき立てられるだろう。サタンの働きは、諸教会がそれらに寄せる信頼を揺るがすことに向けられる。その理由はこうである。もし神の御霊の警告と叱責と勧告に耳が傾けられるなら、サタンは自分の欺きが入り込み、人々の魂をその惑わしで縛り上げるための、これほど明確な足場を得ることはできないからである。『選ばれたメッセージ』第1巻、48頁。

この一節からの簡単な補足です。ヨハネは、神の言葉とイエスの証しのためにパトモス島へ追放された。第三天のメッセージには二つの対象がいる。アドベンチズムの外にいる人々と、アドベンチズムの内にいる人々である。ヨハネは、聖書に従うがゆえに世から迫害されているだけでなく、預言の霊の著作に従うがゆえにも迫害されているアドベンチストを表している。預言の霊に向けられる迫害は、外からではなく内側から来る。

古代イスラエルの始まりに、エジプトで四百年を過ごした後、選ばれた契約の民となるはずの者たちは、もはや安息日を守っていなかった。彼らはキリストの品性や本性を知らず、奴隷の身であった間に植え付けられた神についての誤解に固執していた。十の災い、紅海での救出、天からのマナ、聖所とそのすべての器具、聖なる儀式、外庭・聖所・至聖所、神の律法、彼らに伴った岩、彼らに伴った岩から出た水、さらには竿に掲げられた蛇に至るまで、これらはすべて、神に選ばれた民の神に対する知識を深めるために意図されたものであった。それは段階的な教育であった。その段階的な教育は、律法学者たちが「もはや彼に何も質問しようとしなくなる」まで続き、そのとき彼は、彼らが自分と公開の議論で取り上げる最後の主題を明らかにした。それは、ダビデの名と、キリストが誰であり何者であるかに関わるものであった。

現代の靈的イスラエルの始まりにおいて、靈的バビロンでの1260年の後、選ばれた契約の民となるはずだった人々は、もはや安息日を守ってはいなかった。彼らはキリストの品性や性質を知らず、捕囚の間に身につけた神についての誤解に固執していた。道標、背教、妥協、内部闘争のすべてを伴うアドベンチズムの歴史は、『The Desire of Ages』が出版された1880年代に一つの節目に達した。その書の671ページには、18世紀からもた

らされた理解をはるかに超えて発展した神格についての理解が示されている。

古代イスラエルは、その終焉に、彼らの初期の歴史に由来する神格についての限定的な理解に基づいて引き起こされた論争を抱えていた。イエスの証言はこう言う。父であれ、子であれ、聖霊であれ、彼らは皆「神の本質の満ち満ちたものが、形をとって宿っている」である（コロサイ2:9）。聖書の証言はこう言う。「聞け、イスラエルよ。われらの神、主は唯一の主である」（申命記6:4）。

現代のイスラエルは神格についてさまざまな見解を抱いており、そのうち正しいのはただ一つである。現代のイスラエルの終わりに、神は、猶予の時が続いている間にご自身の品性を明らかにするという働きを完成される。これは神がユダヤ人に対してなされたことと同じであり、神は決して変わらない。私たちが神の本質と品性の理解において永遠にわたって成長し続けるのは確かだが、神がご自身についてご自分の民を教育しようと努めてこられたことを示す、目的をもった真理の預言的な系譜が存在してきたし、その歴史は神が今教えようとしておられる教育の一部でもある。そして、その教育過程に関する預言の言葉に見いだされる情報は、猶予期間の終結に対応する議論の終結点を示している。

「キリストは、先在し、自存する神の御子である……。ご自身の先在について語るとき、キリストは私たちの思いを、年代を定めようのない昔へとさかのぼらせる。永遠の神との親密な交わりのうちにおられなかった時は一度としてなかったのだと、私たちに確言しておられる。そのときユダヤ人が耳を傾けていたお方は、彼とともに育てられた者として、神とともにあられた。」サインズ・オブ・ザ・タイムズ、1900年8月29日。

彼は神と等しく、無限で全能であった……。彼は永遠で自存する御子である。

神の御言葉は、キリストがこの地上におられたときの人性について語る一方で、その先在についても明確に語っている。「ことば」は神的な存在、すなわち永遠の神の御子として、御父と結び合い一つであった。彼は永遠の昔から契約の仲保者であり、彼を受け入れるなら、地のすべての国々、ユダヤ人も異邦人も、彼にあつて祝福されるはずであった。「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」人間も天使も創造される以前から、ことばは神とともにあり、また神であった。Review and Herald、1906年4月5日。

その一節で、彼女はジョンのいちばん最初の言葉から引用している。

初めに言葉があった。言葉は神とともにあり、言葉は神であった。この言葉は初めに神とともにあった。万物は彼によって造られた。彼なしには、造られたものは何一つなかった。ヨハネの福音書 1章1-3節。

初めに、少なくとも二人の神がいた。というのも、ヨハネは「ことばは神であり、神とともにあった」と言っているからだ。創世記の冒頭の節では、ヘブライ語の「エロヒム」が「神」と訳されている。聖書ではしばしば「エロヒム」は単数の神を指すような文法構造に置かれているが、それでもなお複数形である。ヨハネはこの主題に関する第二の証言によって、その節の「エロヒム」を単数の神とみなす見方を退けている。彼の証言は、少なくとも二人の神がいることを立証している。

「預言の霊」を堅持すると公言する反三位一体論者にとってさらに厄介なのは、初めに「神の霊が水の面を動いていた」ということである。水の面を動いていたその「霊」は、御父なのか御子なのか、それともホワイト夫人がそう呼ぶように、天の三者の第三の方なのか。ヨハネの福音書の冒頭の三節の後には、次の言葉が続く。

この方のうちに命があった。その命は人の光であった。光は闇の中に輝いている。そして、闇はそれを理解しなかった。ヨハネによる福音書 1:4、5。

光と闇への言及は、『創世記』の冒頭が述べていることと完全に一致している。

神は言われた。「光あれ。」すると光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光を闇から分けられた。創世記1:3、4

神格の導入に続く創造物語において主題となっている光に関するこの二つの並行する箇所には、後ほど戻ることにする。初めに取り上げられる第一の真理は、神格の構成あるいは本質である。しかし、この箇所は第二章三節まで終わらず、そこでは創造記事における最後の三語が、合わせて「真理」と訳される語を作る三つのヘブライ文字で始まっていることがわかる。

創造の記述は、冒頭で神性を示し、次いでその御言葉の創造の力を述べ、そして最後に、真理と第三天使のメッセージ、さらにアルファとオメガによって表される神の御名を表す神の署名でこの箇所を結んでいる。

そして第七の日に、神は御自分のしていたわざを終え、造ったすべてのわざから離れて第七の日に休まれた。神は第七の日を祝福し、これを聖とされた。神が創造して作り上げたすべてのわざからその日に休まれたからである。創世記 2:2、3

神の御言葉が最初に教える真理の結びは、その箇所のクライマックスである。そこは「神」「創造」「造った」という三つの語で結ばれており、それによって箇所の冒頭が強調されると同時に、同じくらい重要なこととして第七日目の安息日も強調されている。安息日は言うまでもなく、創造の象徴であり、神とその選ばれた民との間のしるしである。「真理」は、それら最後の三語の各語の頭文字三つによって表されている。この証しは、安息日の真理がいかに重大で重要であることを強調しているが、同じくらい深遠なのは、その三文字が第一、第二、第三の天使のメッセージの三つの段階をも表しているという点である。こうして、聖書の最初の箇所において、神の創造の御力のしるしである安息日は、終わりの時における試金石となる問題としても示されている。聖書の最後の書は、ヨハネの福音書におけるヨハネの証しに加える第三の証言を与えている。

ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。今おられ、昔おられ、やがて来られる方、また御座の前におられる七つの御霊から、あなたがたに恵みと平安がありますように。さらに、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリストからも。私たちを愛し、ご自分の血によって私たちの罪から洗い清め、私たちを、神すなわちその父のために、王と祭司としてくださった方に、栄光と支配が世々限りなくありますように。アーメン。見よ、彼は雲とともに来られる。すべての目が彼を見、彼を突き刺した者たちも見る。地上のすべての部族は彼のゆえに嘆き悲しむ。しかし、アーメン。わたしはアルファでありオメガである。初めであり

終わりである。今おられ、昔おられ、やがて来られる全能者、主が言われる。

あなたがたの兄弟であり、患難と、イエス・キリストにある御国と忍耐とを共にしている者、私ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかしのために、パトモスと呼ばれる島にいた。私は主の日に御霊にあって、私のうしろで、ラツパのような大きな声がこう言うのを聞いた。「わたしはアルファでありオメガである。最初であり最後である。あなたが見ていることを書物に書き記し、それをアジアにある七つの教会、すなわちエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオデキアに送りなさい。」黙示録 1:4-11.

黙示録第1章の最初の三節は、最後の警告のメッセージと、そのメッセージが神から人類へどのように伝えられるかを示している。また、それがイエス・キリストの啓示であると述べており、これにより黙示録とダニエル書の違いが明確にされる。ひとつは預言で、もうひとつは啓示である。

『黙示録』において、聖書のすべての書は合流し、完結する。ここで『ダニエル書』は補完される。一方は預言、他方は啓示である。封印されたのは『黙示録』ではなく、終わりの時に関する『ダニエル書』の預言の部分である。御使いは命じた、「しかしあなたは、ダニエルよ、このことばを秘め、書を封じよ。終わりの時まで。」ダニエル書12章4節。『使徒行伝』585頁。

ヨハネの黙示録には、見分けられ、行に行を重ねるようにして一つに結び合わせられるべき預言の筋道がある。これらすべての預言の筋道は黙示録で結末を迎えるが、封印された書は黙示録ではなく、封じられたのは単にダニエル書そのものではない。ダニエル書の中で封印されたのは、「終わりの日に関するダニエルの預言のその部分」であった。

「終わりの日々」は一般的な意味でも理解できますが、それを靈感を受けた言葉（実際にそうですが）として理解するためには、表現「終わりの日々」に預言的な象徴が付随しているかどうかを評価する必要があります。「終わりの日々」は、多くの根拠によって裏付けられている、預言的歴史の特定の期間です。私は近いうちにその歴史を示したいと思っています。それは具体的には、1798年から恩恵期間の終わりまでの歴史です。これを認識する一つの方法は、実際の聖所奉仕において、裁きを表す年に一度の日があり、それが贖罪日であったということです。その実際の儀式は、ホワイト夫人が「反型の贖罪日」と呼ぶものの型でした。預言的、あるいは霊的な贖罪日は、恩恵期間の「終わりの日々」を表し、すなわち最終的な裁きの時期を表しています。

ダニエル書で封印されていた預言は二つあった。終わりの日々に関する預言で、裁きの開始を告げるものをミラー派は認識していた。そのダニエル書の箇所は、8章と9章のウライ川の幻で表されている。ダニエル書で封印されていたもう一つの預言は、裁きの終わり、アドベンティズムの終わり、アメリカ合衆国の終わり、そして世の終わりを告げている。その幻はヒッデケル川で表されていた。

「ダニエルが神から受けた光は、とりわけこの終わりの時代のために与えられたものである。シナルの大河であるウライ川とヒデケル川のほとりで彼が見た幻は、いま成就しつつあり、予言されたすべての出来事はまもなく起こるだろう。」聖職者への証言、112、113。

ウライの幻は1798年に封印が解かれ、神の聖所と神の民を扱っている。ヒッデケルの幻は、ダニエル書11章40節に記されているとおり、教皇権とアメリカ合衆国によって旧ソ連を代表する諸国が押し流された1989年に封印が解かれ、神の民の敵を扱っている。この二つの幻は、黙示録の七つの教会と七つの封印と同様に機能する。一方は教会の内的歴史であり、もう一方は教会の外的歴史であり、どちらも全体を貫いており、特に「この終わりの時代」のためのものである。

しかし、ヨハネの黙示録は「封印された書」そのものではないと言われているが、それが「封印された書」であるとも言われている。

「黙示録は封印された書であるが、同時に開かれた書でもある。それには、この地球の歴史の最後の日々に起こるであろう驚くべき出来事が記録されている。この書の教えは明確であって、神秘的で不可解なものではない。その中では、ダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられている。神はいくつかの預言を繰り返しておられ、それによってそれらが重んじられるべきものであることを示しておられる。主は重要でない事柄を繰り返されることはない。」 Manuscript Releases, 第9巻, 8.

ヨハネの黙示録の封印が解かれているのは、ダニエル書の預言の封印が解かれているからであり、ダニエル書で解かれたまさにその預言の系列は、黙示録にも見いだされる同じ系列である。黙示録の中で封印されていたのは、「終わりの日」における神の民にとりわけ関係する一部分であった。ホワイト姉妹がこの記述を書いた時には、「七つの雷」はまだ封印されていたため、彼女は「それは封印された書である」と記した。彼女はまた、ダニエル書は「封印された書」であった、と過去形で述べている。彼女にとっては、その封印は1798年に解かれていたのである。

彼女の生前に七つの雷に関して封じられていたのは、七つの雷が象徴する将来の出来事そのものだけではなく、むしろ「七つの雷」が、アドベンチズムの始まりがアドベンチズムの終わりと対応していることを表しているという点であった。「七つの雷」は、イエス・キリストの啓示を理解するために必要な最も重要な預言の規則を明らかにすると同時に、神が万物の始めであり終わりであるという、神の本性と御品性の一つの属性も明らかにしている。預言は、神の本性と御品性に結びついた真理には目的をもった発展があることを示している。

イエスが「ユダの部族の獅子」として表されるとき、それは、彼が歴史を通して真理を段階的かつ体系的に明らかにしていくという業を象徴している。彼は、理解されるべき時点に至るまで、預言の言葉に封印を施す。彼は教え導くために、真理に封印を施し、またそれを解く。パルモニとして、イエスは「驚くべき数を定める方」、すなわち His-story を支配する時間の主である。アルファでありオメガであるお方として、彼は他のことのほかに、言語の主でもある。ユダの部族の獅子として、彼は真理が人に明かされる時を支配しておられる方である。

ヨハネの黙示録第1章では、冒頭の三節を過ぎると、神格は三つの明確に区別された位格として示されている。

ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。恵みと平安があなたがたにあるように。

今おられる方、かつておられた方、やがて来られる方から；

また、御座の前におられる七つの御霊から；

また、忠実な証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリストから。ヨハネの黙示録 1:4、5。

聖書の最後の書の冒頭は、父と御霊と御子を示す挨拶を神の教会に明確に伝えている。神の御言葉の終わりは初めを繰り返しており、そうすることで、三位一体の正しい理解の重要性を強調している。それは、フィラデルフィアの者となり、十四万四千人を構成する人々のためである。彼らは、契約史のさまざまな系譜を通して型として示されてきた、最後の契約の民である。これらの証しは、ほかの真理とともに、預言史を通じて神がご自身の本質と御品性に関する知識を段階的に増し加えようとしてこられたことを立証している。

聖書における人間の神に関する無知の最大の象徴は、エジプト、すなわち全世界、したがって全人類の象徴を体現していたファラオであった。その道標は、神がご自身の御名を知らしめようとしておられた文字どおりのイスラエルの初めに、その過程を開始する。文字どおりのイスラエルの終わりには、神の御名をめぐる論争が繰り返された。文字どおりのイスラエルの終わりにおいて、イエスはダビデの歴史を指し示し、「初出の法則」を用いることによって、ユダヤ人との関わりを印づけ、彼らのラオデキヤ的な盲目に関する最終的な宣言を表した。彼らには、彼が何を語っておられるのか理解できなかった。なぜなら、彼らはアルファとオメガの法則を知らず、また自分たちの前に立っておられたアルファとオメガをも知らなかったからである。

霊的イスラエルの初期には、モーセの歴史に典型的に示された論争に並行するものが見られる。アドベンチズムが「終わりの日々」の歴史を歩んできた中で、古代イスラエルの場合と同様に、アルファとオメガをさらに理解する多くの機会が与えられてきた。キリストの時代にそうであったように、アドベンチズムの終わりには、もはや問いが発せられなくなる時点が来るだろう。

黙示録1章の箇所に戻ると、恵みと平安が、今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、また七つの御霊から、さらにイエスからも来ることが分かる。神格は、イエス、七つの御霊、そして「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」として表されており、それによって、その称号で表される特質を備えておられるのは父であることが分かる。これらの特質は神の永遠の御性質を示している。神は永遠から存在しておられ、そして8節と9節では、その同じ特質が明確にイエスに帰せられている。

「わたしはアルファでありオメガ、初めであり終わりである」と、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者である主は言われる。私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、苦難において、またイエス・キリストにある御国と忍耐においてあなたがたと共にある者で、神の言葉のため、またイエス・キリストの証しのために、パトモスと呼ばれる島にいた。

私は主の日に御霊にあつて、背後にラッパのような大きな声を聞いた。その声はこう言った。「わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後である。あなたが見ることを書物に書き記し、アジアにある七つの教会、すなわちエペソ、スミルナ、ペルガモ

、「テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオデキアに送りなさい。」
ヨハネの黙示録 1:8-11

イエスの言葉が赤い文字で記されている聖書を持っている人は、8節と11節で語っているのがイエスであることを知っている。これらの節でイエスは、ご自身を「今おられ、昔おられ、やがて来られる方である主」と名乗ることによって、御父と同一の永遠の本性をお持ちであることを示し、さらにご自身が「全能者」であることも付け加えておられる。

ヨハネの黙示録の冒頭で、すなわちそれが「イエス・キリストの黙示」であると自ら明言するこの書において、イエスがまず語るのは、みずからがアルファでありオメガであること、御父がそうであるようにご自身もまた永遠であり、さらに全能の神であるということです。神のご性質の諸属性こそが、黙示録におけるイエスの最初の言葉なのです。これらの属性は、今なお神格についての当初の立場を擁護するアドベンチストにとって、直接のつまずきとなっています。彼らは、かつて御父が御子をお生みになった時があったと信じています。

ヨハネの黙示録の終わりはヨハネの黙示録の始まりと一致している。

神格の記述の後に、再臨が続く。第22章では、この書の結びが冒頭と一致しており、第22章12節は第1章7節と同様に、再臨への言及によって呼応している。

見よ、私はすぐに来る。私の報いは私と共にあり、それぞれのわざに応じて報いるためである。私はアルファでありオメガ、初めであり終わり、最初であり最後である。彼の戒めを行う者たちは幸いである。彼らはいのちの木に対する権利を受け、門を通過して都に入ることができるからである。外には、犬ども、魔術師、淫行を行う者、殺人者、偶像礼拝者、そして偽りを愛して行う者は皆いる。私イエスは、諸教会においてこれらのことをあなたがたに証しさせるために、私の御使いを遣わした。私はダビデの根であり子孫、また輝く明けの明星である。御霊も花嫁も言う、「来てください。」聞く者も言いなさい、「来てください。」渇いている者は来なさい。望む者はだれでも、いのちの水を価なしに受けなさい。ヨハネの黙示録 22:12-17

再臨に言及した後、イエスは、黙示録1章にあるように、ご自身をアルファでありオメガであると示す。次に、御霊が諸教会に言われることを聞く者と、聞かない者との違いを示す。さらに、第1章1～3節に示されている伝達の過程に言及し、ガブリエルを遣わしてそのメッセージをヨハネに伝えたことを明らかにする。

そして彼は、古代イスラエルの終わりに律法学者とパリサイ人に語った最後の言葉へと立ち返る。彼は、ユダヤ人が彼らの「終わりの時」には理解できなかったことに対し、「終わりの時」にある人々のために『黙示録』で答えることによって、文字通りのイスラエルと霊的イスラエルの双方の終わりを結び合わせる。彼は自分がダビデの根（始まり）であり、その子孫（終わり）であると言う。「ダビデとその主」の問題は、言い争っていたユダヤ人たちにイエスが語った最後の言葉であり、またそれは、フィラデルフィアの教会へのメッセージによれば、ユダヤ人だと自称しながら実はそうではない者たちに対する、終わりの時の最終的な宣言を典型的に示している。

見よ、サタンの会堂に属する者たち、自分たちはユダヤ人だと言いながら実はそうではなく、偽りを言う者たちを—見よ、わたしは彼らを来させてあなたの足もとにひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを悟らせよう。あなたがわたしの忍耐の言葉を守ったので、わたしもまた、地上に住む者たちを試みるために全世界に臨もうとしている試練の時から、あなたを守る。黙示録 3章9節、10節。

聖徒たちの足もとで礼拝する者たちは、主の口から吐き出されたラオデキヤ的なアドベンチストたちである。

あなたは、聖徒の足もとで拝む者たち（黙示録3:9）は、ついには救われると思っている。ここで私はあなたと意見を異にしなければならない。というのは、神は私に、この階級の人々は自らアドベンチストと称していたが背教してしまい、「神の御子自分たちのために再び十字架につけ、あからさまに辱める」者であることを示されたからである。そして、まだこれから来て、各人の真の品性をあらわにする「試みの時」において、彼らは自分たちが永遠に失われた者であることを知り、霊の激しい苦悩に圧倒されて、聖徒の足もとにひざまずくであろう。『小さき群れへの言葉』、12。

聖書と預言の霊によれば、聖徒たちの足もとでひれ伏して拝む者たちは、サタンの会衆に属する者たちである。彼らは自分をユダヤ人だと主張するが、そうではない。フィラデルフィアの教会では、義なるアドベンチストたちに語りかけられている。十四万四千人はフィラデルフィアの人々であり、自分はユダヤ人だと言いながら実はそうでない者たちはラオデキヤ人である。「終わりの日」には、忠実な人々には二つの階級がある。すなわち、十四万四千人と、殉教者となる者たちである。七つの教会のうち、非難のないのは二つだけである。一つはフィラデルフィアで、決して死なない者たちを表し、もう一つはスミルナで、忠実な殉教者を表す。スミルナとフィラデルフィアは、七つの教会の中で、与えられたメッセージに非難が付されていないただ二つの教会である。それでも、どちらの教会も、自分はユダヤ人だと主張しながらそうでない者たちに対処しなければならなかった。これは、彼らは皆、「終わりの日」に同じ状況に直面する同じ教会の一員だからである。一方は血によって証しすることに定められ、変貌の山でのモーセによって表され、他方は決して死ななかったエリヤによって表される者たちである。

また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。「最初であり最後である方、一度死に、今は生きておられる方がこう言われる。私はあなたの行いと患難と貧しさを知っている（しかしあなたは富んでいる）。また、ユダヤ人だと言いながら実はそうではなく、むしろサタンの会堂に属する者たちの中傷も知っている。あなたが受けようとしているこれらのことを恐れるな。見よ、悪魔はあなたがたのうちの幾人かを牢に投げ入れて、あなたがたを試すであろう。あなたがたは十日の間、患難に遭う。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、私はあなたにいのちの冠を与えよう。」ヨハネの黙示録 2:8-10。

イエスがスミルナの教会の悲惨な状況を述べるにあたり、「しかし、あなたは富んでいる」とただ一つの肯定的な言葉を語り、富んではないサタンの会堂の者たちと彼らに対比している。黙示録において、自分は富んでいると思いながら実はそうではないアドベンチストたちは、「自分はユダヤ人だ」と言いながら実はそうではないユダヤ人であり——彼らはラオデキヤのセブンスデー・アドベンチストである。

黙示録の冒頭では、神格は三つの位格として示されており、黙示録の終わりではイエスと聖霊には直接言及があるが、父なる神にはない。だがそれは問題ではない。というのも、「行に行を重ねる」という原則に「初めが終わりを示す」という原則を組み合わせると、父なる神が黙示録の最後の節々におられると認めることが求められるからである。なぜなら、父なる神は冒頭の節々において、すでにそこにおられると特定されているからだ。これはヨハネの福音書1章と何ら違わない。そこではヨハネは聖霊を直接には明示していないが、聖霊はそこにおられると理解される。というのも、「初めに」という表現が最初に記されたときから聖霊はそこにおられたからである。ヨハネの福音書1章の証言は、まったく同じ語句「初めに」で始まっている。

「初め」は預言的な象徴であり、「行に行を重ねる」などの預言の規則に基づいて解釈すべきである。モーセにおける「初め」は、ヨハネの福音書の「初め」であり、黙示録の「初め」であり、同時に黙示録の「終わり」でもある。これら四つの箇所のうち、二つでは天の三者のすべてが示されており、一つ（ヨハネの福音書）では聖霊が欠けているかもしれない、四つ目では父が欠けている。しかし、これらを合わせて見ると、四つの箇所すべてに三位の神が表されている。

キリストは御父を示すために来られ、聖霊は御子を示すために来られた。三位とも永遠にわたる犠牲を払われた。父は世をそれほど愛し、イエスをお与えになった。イエスは世をそれほど愛され、ご自身が創造した者たちと同じ肉体を、永遠に帯びることを受け入れられた。創造主がご自身の被造物の一部となることを選ばれたというその行為は、なんとという与えであろうか。三位一体の第三位格はご自身をお与えになった。というのも、聖霊は、人間という被造物の内に住まわれることを、永遠にわたって受け入れられたからである。

おそらくこのことが理由で、聖霊は神の民を表す象徴とたびたび結び付けられている。聖霊は、人類と共におられる神格の位格である。ゆえに、聖書における聖霊の象徴は、多くの場合、聖霊または人間を表すものによって表されている。初めに、聖霊は水の上を動いておられた。

そして彼は私に言った。「あなたが見た、淫婦が座っている水は、もろもろの民、群衆、諸国、諸言語である。」ヨハネの黙示録 17:15.

モーセが建てた幕屋の中で、職人たちが従うべき具体的な型が特に示されなかった唯一の家具は、七枝の燭台であった。燭台は、人性と神性の結合を表している。このため、燭台の意匠だけが、幕屋の中で人間が寄与できるように残されたものであった。キリストがその間を歩まれる七つの燭台は七つの教会であるとされている。しかし燭台は油を燃料とし、その油は聖霊を表しており、光のために炎を支えた芯は、祭司たちの使い古した白い亜麻布の衣から作られていて、世の光として輝くキリストの義を表していた。神の民は世の光であるが、その光は聖霊の油によってのみ支えられる。聖霊は、聖書における記述において、しばしば人々と結び付けて語られている。

そして、御座からは稲妻と雷鳴と声が発し、御座の前には火のともしびが七つ燃えていた。それは神の七つの御霊である。黙示録 4:5

ここでは、七つのともしびが「神の七つの霊」とされているが、七つの燭台は七つの教会であると告げられている。

あなたが見た、わたしの右の手にある七つの星と、七つの金の燭台の奥義はこうである。七つの星は七つの教会の御使いたちであり、あなたが見た七つの燭台は七つの教会である。ヨハネの黙示録 1:20.

七つの燭台は、七つの御霊であり、また神の教会でもある。

そして私は見た。見よ、御座と四つの生き物との間、また長老たちの間の真ん中に、ほふられたかのような小羊が立っていた。その小羊には七つの角と七つの目があり、その目は全地に遣わされた神の七つの御霊である。ヨハネの黙示録 5:6.

七つの角と七つの目は、全地に遣わされる聖霊でもあり、また、キリスト者が洗礼を受けると、彼は父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けたがゆえに、全地へと遣わされる。日曜法の危機の殉教者たちと、1844年以来、現代の霊的イスラエルにおいて信仰のうちに死んだすべての者の上に宣言された祝福において、「しかり」「彼らはその労苦から休むことができる」と聖霊が語られるとき、彼らの葬りに際しての悼辞を与えるのは聖霊である。というのも、彼らが命を捧げるに至るまで、その労苦の間じゅう、聖霊はそこにおられたからである。

また、私は天からの声を聞いた。「書き記せ。今から後、主にあって死ぬ者は幸いである。」しかり、御霊は言われる。「彼らはその労苦から休む。彼らのわざが彼らに伴うからである。」黙示録14:13

ヨハネの黙示録の終わりと初め、聖書の初め、そしてヨハネの福音書の初めを考えると、三位一体の三位格がすべて示されているのがわかる。ただし父なる神については、「line upon line」の適用に基づいてそこにおられることが理解される。御子はそこにおられ、ご自身を「アルファでありオメガである」と名乗っておられる。

人間性と神性の結合が、聖霊と人類の結合であると認識するなら、聖霊の象徴が人類の象徴と結び付けられている理由が理解できるでしょう。この観点を念頭に置いて、これまでたびたび取り上げてきた二つの「初めに」に戻ります。

初めに、神は天と地を創造された。地は形がなく、空虚で、深淵の面には暗闇があった。神の霊が水の面を動いていた。神は言われた、「光あれ」。すると光があった。神はその光を見て、良いとされた。神は光を暗闇から分けられた。創世記 1:1-4.

初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。この言葉は初めに神とともにあった。すべてのものは彼によって造られた。造られたもので、彼によらずにできたものは一つもなかった。彼のうちに命があった。その命は人の光であった。光は暗闇の中に輝いている。暗闇はこれに打ち勝たなかった。ヨハネによる福音書 1:1-5.

「初めに」についてのこの二人の証人を用いて、万物を造られたことばである神は、ご自身のいのちをも与えられた。なぜなら「彼のうちにいのちがあった」からであり、彼のいのちは人々の「光」であった。被造の人の「光」とは、創造主の義である。創造主の義

は、聖所にあるろうそくの芯である。

また彼女には、清く白い上質の亜麻布の衣を身にまとうことが許された。これは、その亜麻布が聖徒たちの義であるからだ。ヨハネの黙示録 19:18.

芯を燃え続かせる油は、信者の生活における聖霊の働きを表しています。初めに、地は闇に覆われ、光はありませんでした。そしてイエスは、人々に光があるように、ご自身のうちにあったそのいのちをお捧げになりました。

地に住む者のうち、その名が、世の基が据えられた時からほふられた小羊のいのちの書に記されていない者は、みな彼を拝む。黙示録13:8

イエスは人類のためのいけにえとなることを選ばれ、人々が光を得るためにご自身のいのちをささげられた。これら二つの箇所が示すとおり、光がもたらされるときはいつでも、その光は光と闇に象徴される二種の礼拝者、すなわち昼の子らと夜の子らを生み出す。

しかし、兄弟たちよ、あなたがたは暗闇の中にはありません。その日が泥棒のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたは皆、光の子、昼の子です。私たちは夜に属する者でも、暗闇に属する者でもありません。テサロニケ人への第一の手紙 5:4,5

聖霊が昼の子らと結ぶ密接で永遠の関係を認識するとき、神の子らと聖霊の象徴がなぜこれほど密接に関連しているのかが理解できる。黙示録の最後の箇所では、私たちはイエスをアルファでありオメガである方として見、また「line upon line」の適用を通して御父を見、そして聖霊はご自身の最後の象徴的表現を与えておられる。というのも、昔の聖なる人々は聖霊に動かされて語ったからである。創世記における聖霊ご自身についての最初の言及は、水の面を動いておられる、あるいは人類の上を動いておられる方として聖霊を示しており、ご自身についての最後の言及は次のとおりである。

そして御霊と花嫁が「来なさい」と言う。聞く者も「来なさい」と言え。渴いている者は来なさい。望む者はだれでも、いのちの水を無償で受け取りなさい。ヨハネの黙示録 22:17

初めから終わりまで、聖霊は人類と結びつけて示されている。というのも、「昼の子ら」は神性と人性の結合を表しているからである。パウロは、イザヤと同様に、人は器であると示している。聖所の燭台には芯を置くための器が備えられており、油がその器に注がれて、キリストの義という光を現すために必要な燃料が供給された。私たちは聖霊の器であり、聖霊は神格の第三位格として神の御言葉の初めから終わりまでそのように示され、また預言の霊の著作においても明確に同様に示されている。

アドベンチズムの始まりと終わりに成就した第二の天使のメッセージには、教会に向けたものと世界に向けたものという二つの明確に異なるメッセージがある。